Osaka University Knowledge Archive

Title	「一次的ことばと二次的ことばの往還」としての第二言語習得過程 : 就労現場と日本語教室の言語活動分析から
Author(s)	菊岡, 由夏
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58296
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【8】

氏　　名	菊　岡　由　夏（きく おか ゆ か）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４６４１　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	「一次的ことばと二次的ことばの往還」としての第二言語習得過程－就労現場と日本語教室の言語活動分析から－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　村岡　貴子 （副査） 教　授　西口　光一　　准教授　大村　敬一

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，近年議論されている「生活者のための日本語教育」の構築に向け，日々の生活から第二言語としての日本語を習得する第二言語話者の言語習得過程の現状と課題を明らかにすることで，彼らに必要な日本語能力と，その日本語能力を育成する日本語教育のあり方の検討を目的とした基礎的研究である。そのために本研究では，第二言語としての日本語を用いた生活環境（本研究では「第二言語生活の文脈」とした）として，多数の外国人が働く「就労現場」での言語活動を，第二言語としての日本語学習の環境（本研究では「第二言語学習の文脈」とした）として，日本語教室の言語活動を分析し，「第二言語生活の文脈」を通した言語習得への，「第二言語学習の文脈」からの貢献可能性について考察を行った。

第1章では，本研究の前提となる「生活者のための日本語教育」の現状について論じた。また第2章では，「第二言語生活の文脈」を通した言語習得に関する研究として，自然習得研究（長友，2002a等）を概観し，その成果と課題について論じた。自然習得研究の課題としては，それらの研究が第二言語習得過程に対する環境の影響に言及しながらも，第二言語習得過程を実際に言語習得が生じる文脈と切り離して分析を行っていること，また，それにより，言語習得過程と環境との具体的な関連を明らかにできていないことを指摘した。その課題を乗り越える視点として，本研究では，社会文化歴史的観点（Hall, 1995b）からの分析の必要性を指摘した。

第3章では，社会文化歴史的観点による分析の枠組みとして，本研究で用いた岡本（1985,2009）の「一次的ことば」と「二次的ことば」について論じた。この概念は，ロシアの心理学者ヴィゴツキーの理論にもとづいたものである。「一次的ことば」と「二次的ことば」とは，ことばの発達を，言語活動の実践過程における，参加者間の関係性とそこで用いられるリソースとの関連により示した概念である。「一次的ことば」とは，文脈を共有する参加者間での言語活動にみられる，非言語的リソースを含む共有のリソースに媒介されたことばを示す。「二次的ことば」とは，文脈を共有しない「他者」との言語活動で必要とされることばである。「他者」に対する言語活動では，文脈を共有する者との間で利用可能であった共有のリソースを用いられなくなる代わりに，「他者」にもわかるように言語的リソースを説明的に用い，意味を伝える必要が生じる。また，「二次的ことば」による言語活動では，相手との文脈の共有・非共有の程度を自覚的に判断し，それに応じて言語的リソースを随意に用いる「意識の自覚性と随意性（ヴィゴツキー，2001）」が必要とされる。子どもの言語発達では，通常「一次的ことば」から始まり，学校教育を通して「二次的ことば」を学ぶ過程をたどることが明らかにされている（岡本，1985；磯村，2010；岩田，2010）。しかし，本研究で取り上げた第二言語習得過程では，教科書等を学ぶことによる「二次的ことば」から始まる場合も予測された。そのため本研究では，第二言語習得過程を「一次的ことば」から「二次的ことば」への移行だけではなく，「二次的ことば」から「一次的ことば」への移行を含めた，「一次的ことばと二次的ことばの往還」の過程であると定義した。

次に，第4章では「第二言語生活の文脈」として，就労現場における言語活動の分析を行った。就労現場の言語活動には，大きく分けて三つの言語活動が観察された。一つ目は「作業現場における作業員同士の言語活動」，二つ目は作業中に生じた不具合の現場を視察し，その原因を議論する「現場検討会」，三つ目は「調査員と外国人従業員の言語活動」である。「作業現場における作業員同士の言語活動」は，日常的に作業を共にする作業員同士が，共有のリソースを活用する「一次的ことば」による言語活動が頻繁に生じることが明らかになった。また他の二つの言語活動は，いずれも「他者」を含んだ言語活動であり，「二次的ことば」による言語活動の場となっていることが明らかになった。これらの分析を通して，就労現場の言語活動を通して日本語を習得する外国人従業員の第二言語習得過程の現状として，「一次的ことば」にたずさわる能力を十分有している一方で，「二次的ことば」による言語活動にたずさわる能力を十分に有していないことが明らかになった。また，外国人従業員が社内における現場検討会に参加したり，日本社会において新たな生活を切り開いたりするためには，「一次的ことば」だけではなく，「二次的ことば」の習得，及び，それに伴う「意識の自覚性と随意性」の習得が必要であると考えられた。

第5章では，「第二言語学習の文脈」として日本語教室における言語活動を分析した。初めに「第二言語学習の文脈」の特徴として，教師の言語活動への介入行為を分析した。その結果，日本語教室における教師は，(1)言葉の意味を問う，(2)視覚的リソースの言語化を求める，(3)適切な言葉を考えさせる，(4)学習者の経験を問う，等の介入行為により，自らを言語活動における「他者」と位置づけることで，教室での「二次的ことば」による言語活動の実現を志向し，学習者がその言語活動に参加する機会を提供していることが明らかになった。一方で，教師は(5)学習者の発話を予測する，という介入行為により，「他者」でありながら学習者に共感的な態度を取ろうとする「共感的な他者」として，「二次的ことば」による言語活動に十全にたずさわることのできない学習者の手助けをしていることがわかった。これらの分析から，基本的に「第二言語学習の文脈」は，「二次的ことば」による言語活動を志向する環境が形成されており，教師によって「二次的ことば」による言語活動にたずさわるためのサポートもなされていることがわかった。また，これらの働きかけにより，「第二言語学習の文脈」は，「一次的ことば」を「二次的ことば」へと移行させるために有用な環境が提供されていると考えられた。

また，第5章では，「favorite phraseの使いまわし（菊岡，2004）」という現象をもとに，「第二言語学習の文脈」で，学習者自身で「二次的ことば」を「一次的ことば」へと往還させていることを明らかにした。「favorite phraseの使いまわし」とは，教科書等で示され，教師によって説明されたフレーズを，学習者自らが新たな場面において使うこと，また，それが一人の学習者だけではなく，同じ教室で学ぶ様々な学習者によって使い回されることで，その教室独自の新たな意味が形成される様子を示した現象である。この現象は，教科書や教師によって説明的に示されていた「二次的ことば」が，その教室の仲間に使い回されることで，彼らだけに理解可能な意味を担った「一次的ことば」へと移行したものであると考えられた。この現象から「第二言語学習の文脈」では，学習者が個々の「第二言語生活の文脈」で培った「一次的ことば」を「二次的ことば」へと移行させる環境と共に，教室で学んだ「二次的ことば」の「一次的ことば」への移行，すなわち「一次的ことばと二次的ことばの往還」が可能となると考えられた。

さらに第6章では，第4章及び第5章の研究成果をふまえ，第4章の研究でフィールドワークを行った企業が実施した「社内日本語教室」の実践についてまとめ，その「生活者のための日本語教育」としての可能性について検討した。この社内日本語教室は，通常の地域日本語教室にみられる学習者（外国人従業員），日本語教師，日本人ボランティアで構成されるだけではなく，社外ゲストも頻繁に招かれていた。この状況から，この社内日本語教室は「他者」との交流が可能となり「二次的ことば」による言語活動に参加しやすい環境が提供可能であると考えられた。また，ここには日常的に同じ作業現場で働く日本人従業員も参加していた。彼らは同じ職場で働く者として外国人従業員と文脈を共有することが可能な一方で，作業場面とは異なる「日本語教室」では，その文脈に不慣れな「他者」として関わることも可能であると考えられた。さらに，社内日本語教室の実施は，外国人従業員の日本語力向上にとどまらず，日本人従業員にも同様に新たな日本語力の獲得を促す場になると考えられた。ある日本人従業員は，それまでは外国人従業員の説明不十分な日本語を，状況により理解し，その言い方を「仕方がない」とあきらめていた。しかし，社内日本語教室への参加を通し，その日本人従業員は言いたいことを理解しても，あえて外国人従業員に説明を求める等「他者」としての立場を自覚的に取れるようになったことを報告している。これは，社内日本語教室への参加が，日本人従業員の「二次的ことば」を志向する行為の習得につながったことを示す現象であると考えられた。

最後に，第7章では本研究の結論として，「生活者のための日本語教育」が目指すべき日本語と，「生活者のための日本語教育」の在り方について論じた。「生活者のための日本語教育」が対象とする学習者は，今後の日本社会において「生活者」として自らの生活レベルの向上を目指す人々である。本研究では，上記の結果から「生活者のための日本語教育」に必要な日本語は，彼らの日常生活に必要な生活日本語だけではなく，彼らの目的を実現させるための「越境のための日本語（菊岡・神吉，2010）」であると考えた。「越境のための日本語」とは，文脈を共有する人々との日本語による交流だけではなく，自分たちの文脈を越えた文脈を共有しない「他者」とも日本語による交流を実

現し，第二言語話者自らが新たな文脈を作り上げることを可能にするための日本語である。そのような日本語は，豊かな「一次的ことば」による学習環境を基礎に，「二次的ことば」による言語活動に参加する機会を増やすことで実現する「一次的ことばと二次的ことばの往還」を通して習得することが可能であると考えられた。また，「越境のための日本語」は，日本社会における生活レベルの向上を目指す第二言語話者に限らず，多文化共生社会を生きる日本語を第一言語とする人々にも必要な日本語であると考えられた。そのため，「生活者のための日本語教育」とは，単に第二言語話者の日本語力の向上を目指す場所だけではなく，そこに参加する日本人の「越境のための日本語」を育成すべき「市民教育（小玉，2003）」としても位置づけられるべきであると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文では、就労等の目的で日本に在住する生活者としての外国人への日本語教育の構築を目指して、第二言語話者の言語習得過程の現状を分析し課題を考察している。主要な議論は、外国人の就労現場での言語活動を第二言語生活の文脈、また、日本語教室での言語活動を第二言語学習の文脈とした上で、後者の前者への貢献の可能性を考察したものである。

本論文では、ヴィゴツキーの理論に基づいた岡本（1985, 2009）の知見から、非言語的リソースを含む共有のリソースに媒介されたことばを「一次的ことば」、文脈を共有しない他者との言語活動に必要なことばを「二次的ことば」とした。第二言語習得過程は、「一次的ことば」から「二次的ことば」への移行に加え、両者の「往還」の過程と定義された。

就労現場のデータは、作業員同士、現場検討会、および調査者と外国人従業員との間における言語活動である。多くの発話データや写真も活用し、従来必ずしも明らかではなかった就労現場の言語活動を詳細に論じており、高く評価できる。日本語教室での言語活動に関する分析からは、教師が自らを「共感的な他者」と位置づけた点等、優れた知見を提示した。

企業での社内日本語教室の分析からは、教室で提供される学習環境の可能性を示唆し、かつ、日本人従業員の教室への参加が、自身の新たな日本語力の獲得を促すことも指摘した。

最後に、総括の際に提示された「越境のための日本語」は、文脈を共有しない「他者」と日本語での交流を実現し、第二言語話者による新たな文脈の構築を可能にすると結論している。この結論は、〈日本語〉学習に限らず、あらゆる言語の学習に対して、単に「言語」を習得するのではなく、言語を通して他者と交流する能力を獲得することの重要性を示しており、越境の、あるいは他者との対話のための言語の学習とは何かという理論的な問いを投げかけてくる。この意味で、本稿の結論には、今後日本語学習に限らない一般的な文脈での理論化が期待される。

なお、本論文は、第二言語習得過程を促進する一次的ことばと二次的の往還という知見を提示したものの、往還とは言えない別の事例への言及は不十分であり、二次的ことばへのさらなる検討も必要である。しかし、それらは、独創的な本研究自体を損なうものでは決してない。

以上のことから、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。